

熊野の
木林から

熊野の廃墟に巣くう妖怪は少ない。それは、熊野の人々の大らかな人柄を反映してのことだ。

さて、以前本コラム「其の十六」にて廃墟と妖怪の関わりについて書かせてもらった。そこでは、熊野の妖怪は自然に巣くうものがほとんどで、廃墟に巣くう妖怪は聞かない、と整理した。そもそ

今回のコラムでは、熊野好き、妖怪ファンとして、少しとんがった話を書かせてもらう。不愉快になる人がいたなら、熊野好きが故のこととしてご容赦頂きたい。

怪し熊野

「廃墟と熊野の妖怪」

其の(天)



和歌山大学
システム工学科
システム学
環境システム学
中島敦司教授

も、妖怪が廃墟に巣くう理由は、その場への想いが関わっている。特に恨みや執念だ。人に無視された神の怒りの場合もある。熊野の廃墟に巣くう妖怪が少ない理由は、熊野の人々が恨みや執念、怒りといった感覚を持ちにくいからだと分析している。

熊野では、今でも多くの移住者を受け入れているが、それも熊野人の大らかな気質がなせることだろう。そのためか、熊野の妖怪には殺しをする凶悪なものも少ないし、恐ろしいはずの鬼や天狗ですら神格化して付き合ってきた。

先日、熊野の妖怪文化を紹介する映像を拝見する機会があった。その映像の背景は、ずっと寂しい廃屋のシーンであった。いかにも「出そう」だと感じてしまふ寂寥(せきぼく)なシーンが続き、それでいてどこか懐かしい雰囲気であった。人気アニメ「夏目友人帳」に通じるイメージだった。廃墟は集落内では異質な存在である。異質性は往々にして妖怪を生み出す



熊野の妖怪が巣くうのは、人里と自然の境界付近が多い。荘厳な自然と関わった妖怪が大半だ。写真は人を喰(く)らう妖怪、肉歌や一本足が出たという果無山説。

背景となるが、熊野の妖怪の多くは寂寞レベルの異質性では生まれていない。寂寞、恨みや執念、怒りが生み出した妖怪は全国区では普通であっても、熊野では普通ではない。

文化は常に変化するし、淘汰(とうた)もされる。それが世の常だ。その中で、地域色は失われていく。筆者は、熊野の妖怪は地域色を失いつつある熊野アイデンティティを後生に伝える重要なツールだと考えている。だから、全国妖怪の同系として世間に広まっていこうことを残念に感じる。熊野の妖怪は自然と人の微妙な距離感、熊野人の自然を大切に作る気質の中に巣くう神秘的な存在であり、寂寞の中に巣くうような人間本位の存在ではない。筆者は、世の標準化の流れにあらがってでも、熊野の妖怪を熊野人の大らかさに通じる存在だとして紹介していきたい。

中島敦司(なかしま あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪伝承)、NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

